
本能寺カプリッチョ

小宮山蘭子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本能寺カプリッチョ

【Nコード】

N3688F

【作者名】

小宮山蘭子

【あらすじ】

本能寺でダンナさまを殺したミッチー。仇を討つために、もうすぐモンキーがやってくる：「本能寺の変」に、甘く切ない乙女心・妄想スパイスを注入してみました。

もうすぐ、あのモンキー野郎の軍勢が私を殺しにやってくる。
本能寺で死んだ偉大なダンナさまの復讐のために。

憎い仇であるこの私を倒すために。

モンキーはたくさん仲間と合流したらしい。

私を確実に殺そうとするだろう。

そうすれば、モンキーは英雄に……

あのお調子者は、きつとお涙頂戴のうざったいスピーチでもするんだろうな。

「ふふ」

と、笑いがこみあげた。そんなことはもうどうでもよかった。

ダンナさま：本能寺で、火の中に消えた私の最愛の人。

私、ずっとあなたのことが好きでした。

あなたのためなら死んでもいいと、一生懸命尽くしてきました。

私は平凡であなたに比べれば小さな存在だったけれど、その偉大な人生にこの手で終止符をうち、すべてを泡にした。

みんなどんなに悔しがることでしょう。

そして、そんな悲しく美しい運命に選ばれた私を、どんなに妬むことでしょう。

今は、自分を誇りに思います。

愛しいあなた、今はもう誰のものでもない、私だけのあなた。

昔からたくさんの人に仕えてきたけれど、ダンナさまほどステキな人はいなかった。

あるときは強く大胆に、またあるときは恐ろしく残酷なまでに、ダンナさまは力を振るって、たくさんの人を屈服させていた。

天下人。魔王。カリスマ……いろんな呼び方をされていたけれど、

ダンナさまにはどんな言葉もあてはまらない。

鋭い目で見つめられたら、私は腰の力が抜けて、息ができないほど胸が高鳴った。

ダンナさまに認めてほしくて、一生懸命勉強し、いろんな人と会って話をし、時には死ぬのも覚悟で敵の中に飛び込んだ。

センスがよくて流行に敏感なダンナさまについていきたくて、必死で自分を磨いた。

やがて、私はたくさん実績を重ね、ダンナさまの目に留まるようになった。

歌もお茶も「ミッチーが一番上手」と誉めてくれるようになり、お給料もどんどんあげてくれて……

ああダンナさま、あの頃の天にも昇る気持ち……私の人生で最高のときでした。

私はダンナさまの寵愛を一身に受け、他の家来たちにも一目おかれるようになった。

けれども、すぐにあいつらが……あの『モンキー』や『タヌキ』が、私からダンナさまを奪おうというんな手を回して、ダンナさまに取り入るようになった。

モンキーは、暑苦しい田舎者のくせにダンナさまを喜ばせるのがうまくて、謙虚に慎ましく仕えていた私をあざ笑うみたいに一気に出世街道を駆け上っていった。

タヌキの方もあなどれなかった。タヌキが遊びに来たとき、私は接待係をすることになった。けれど、私が出したお魚を「変な臭いがある」って文句をつけて、タヌキは食べなかった。

ダンナさまは激怒して、私を蹴ったわ。悔しくて、泣き明かした。ダンナさまの心が私から離れていく……

もしかしたら、私もいつか切り捨てられてしまうかもしれない。最悪の場合、殺されてしまうかもしれない。

ああ、こんなに好きなのに。こんなに必死でお仕えしてきたのに。

気が狂いそうだった。長くて暗い夜、一人慟哭した。

ダンナさまを誰にも渡したくない。そんなことになるくらいなら、いっそ……

おぼろげに抱いていた感情が、だんだんくつきりと輪郭を帯び、固いものに変わりつつあった。

5月の終わり、中国地方でモンキーは毛利のオッサンとケンカしていた。

私はダンナさまから「モンキーの応援に行け」と命じられた。

しかも、ダンナさま本人も、すぐにモンキーを助けに行くという。

ダンナさまは私よりモンキーの方を愛している……そう確信した瞬間、私の中でくすぶっていた何かがはじけて、炎が迸った。

ダンナさまは他の加勢の人たちと待ち合わせするために、京都の本能寺で一泊すると言った。

お供の者が少ない、このチャンスを逃す手はない。

私はできるだけたくさんの手下の子たちをかき集め、本能寺に向かった。

道すがら、胸の中にいろんな思い出が去来したけれど、私の決心は揺るがなかった。

ダンナさま、私のこの手で殺してあげる。

死んでしまえば、もう誰のものでもない。私だけのあなたになる。

6月2日、深夜。

本能寺を取り囲むと、私の手下たちが乱入。ダンナさまたちと斬り合いになった。

遠く離れた馬上から見ていた私は、ダンナさまの姿を探した。

ダンナさまは庭先まで出てきて、私の手下を斬って斬って斬りまくった。

白い寝巻き姿だったけれど、その雄姿は凛々しくて気高くて、まるで鬼神そのもの。

身震いした。そして、涙がホロホロこぼれた。

本能寺を守るのは少人数だったから、あっという間に私たちが優勢になった。

やがて火が放たれ、寺はみるみるうちに炎に包まれた。

ダンナさまはおつきの者にうながされ、退いた。そして、奥の部屋へと消えていった。

扉が閉まる瞬間、私のいる方をチラリと振り返った。

あるとき、ダンナさまは何を思ったのだろうか？

私を怨んだろうか？

憎い・悔しいと地団太踏んだらうか？

でも、そんな最期はあなたには似合わない。

「ミッチー、あのバカ野郎め、やりやがったな」

そう言って、高らかに笑ってくれてたらしいのに。

寺は全焼した。

私の愛しい人は、この世から跡形もなく消えていなくなった。

すべては灰になり、死体は見つからなかった。

私は手を合わせ、何かに感謝したいような想いでいっぱいになった。
醜い死に様をさらさなかった……最後の最後まで、なんて美しく気高い人だろう。

モンキーは毛利のオッサンと急いで仲直りし、すごい勢いで京都の方に戻ってきた。

ほどなく、モンキー軍と私たちは激突。

モンキー軍の半分以上の人数だった私たちになす術はなかった。

でも、想いを遂げた私には、本当のところもう何もかもがどうでもよかった。

天下取りにさえ、全然興味がなかった。

だって、今まで頑張ってきたのは、すべてあの人のためだけだったから。

あの人がいない今となつては、もうなんの夢も希望もないのだから。
ただ、私はモンキーに直接殺されるのだけは嫌だった。
あんなヤツの手にかかるくらいなら、自殺したほうがマシ。
だから戦場を逃れて、一人で死に場所を探した。

小さな峠にさしかかった。

私は立ち止まり、夜空を仰いだ。

大きな流れ星が一つ、すうーっと流れた。

ダンナさま……

その刹那、体中に焼けるような熱い感触が走った。

目を落とすと、竹槍を持った男たちが取り囲んでいた。

いくつもの槍の先が私の身体を突き刺していた。

あまりに痛くて、ううっと小さく声が出た。

けれど、あの胸の痛みに比べたら、このくらい平気、

辛くなんかない。

もうすぐ会えるんだもの。

愛しいあの人に。

私だけの、大切なダンナさまに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3688f/>

本能寺カプリッチョ

2010年10月10日16時57分発行